

日本学術会議だより No. 2

「日本高齢社会総合研究センター(仮称)の設立についての提言」を公表

昭和61年 8月 日本学術会議広報委員会

本会議高齢化社会特別委員会は、このたび、「日本高齢社会総合研究センター(仮称)の設立についての提言」をとりまとめ、本会議運営審議会の承認を得て、公表いたしました。

今回の「日本学術会議だより」では、この「提言」の概要に加えて、本会議と学・協会とを結び付ける上で重要な役割を果たしている研究連絡委員会の概要等を紹介し、また、本年9月に開催を予定している本会議主催の公開講演会についてお知らせいたします。

「日本高齢社会総合研究センター(仮称)の設立についての提言」(概要)

昭和61年 5月26日

日本学術会議高齢化社会特別委員会

今日、高齢社会への移行の問題が大きく取り上げられているにもかかわらず、我が国の研究体制は国際的にみても遅れており、とくに人文・社会科学の分野においてそれがいちじるしい。そこで、この遅れを取り戻して時代の要請にも応えるために、我々は「日本高齢社会総合研究センター」(仮称)の設立を提言したい。

1. 総合研究センターの目的

すでに日本学術会議は、昭和55年、「国立老化・老年病センター」設置についての勧告を内閣総理大臣あてに行っている。この医学・生物学を中心とする研究・診療型センターと緊密な連携を保ちつつ、本「日本高齢社会総合研究センター」は、人文・社会科学を中心として、(1)高齢社会の構造問題、(2)高齢層をめぐる総合政策、(3)高齢者の生活課題を総合的に研究するものである。また、本センターにおける研究は3つの原則、すなわち(1)高齢者主体の原則、(2)地域特性の原則、(3)国際交流の原則を重視する。

2. 当面の研究課題と活動

(1)地域福祉・在宅福祉との関連におけるソーシャルケアのあり方、(2)高齢社会における全年齢層の生涯学習体制の確立、(3)70歳まで働ける雇用体制づくり、(4)健康で自立的な高齢者の社会的役割の重視。またこれら以外に、(5)高齢社会に関する研究者・実務専門家・政策担当者などキーパーソンの養成、(6)高齢者、わけても75歳以上の後期高齢者の生活実態と生活意識の全国的及び国際的調査、ならびにモデル調査地域における高齢社会化過程の追跡調査の実施も必要不可欠なものである。

3. 総合研究センターの性格

(1)法律にもとづく独立性の高い法人とする。
(2)国の出資による基金を基礎として設立されるが、そのほかにも一般寄付、研究受託費などを加えて弾力的に運営する。
(3)人文・社会科学を中心とする全国的なネットワーク型の中枢的研究センターであって、官庁や大学の付置型ではない。

4. 研究の運用

(1)研究・調査は総合研究センターの自主研究のほか、受託研

究・委託研究を行い、できれば研究助成も行いたい。

(2)いずれの研究・調査も、必要な研究者で随時編成するプロジェクト・チーム方式によって組織する。

(3)大学、省庁、自治体、企業体、その他の研究機関から、外国人研究者も含めて、短期・長期の流動研究員を受け入れ、研究者と実務家との交流をはかると共に、研究者・政策担当者を養成する。

(4)また必須の活動として、情報セクター「調査室」において高齢者調査と高齢社会化過程の追跡調査を行う。

5. 研究の機構

次の諸セクターから構成される。

(1)研究セクター、(2)情報セクター(調査室・資料室)、(3)研修セクター、(4)公開活動セクター、(5)国際交流セクター

このような構想の下に、本「日本高齢社会総合研究センター」は、高齢社会に関する研究を、人生80年代階の文明史的意味の究明を含めて行っていく。

「中性子回折・散乱研究の推進に関する意見—物理学、結晶学両研連の意見」を公表

本会議物理学、結晶学両研究連絡委員会は、このたび、「中性子回折・散乱研究の推進に関する意見」をとりまとめ、本会議運営審議会の承認を得て、両委員会委員長の連名で、関係機関へ送付した。

<「意見」の概要>

現在、日本原子力研究所において、改JRR-3研究用原子炉の建設が進められているが、この原子炉の利用は、物理学、結晶学はもとより、関連諸分野における中性子回折研究に重要な寄与を果たすものと思われる。

一方、この原子炉には、原研の外に、東京大学物性研究所、東北大学理学部等が多数の各種測定装置を設置する計画がなされている。

物理学および結晶学両研究連絡委員会は、これらの研究機関等によって改JRR-3を利用する中性子ビーム実験装置が設置されることが、我が国の基礎科学の進展に極めて大きな意義をもつことにかんがみ、この計画が遅滞なく達成されるよう、関係各方面の御配慮をお願いする次第である。

研究連絡委員会（略称「研連」）とは？

日本学術会議法により、科学に関する研究の連絡を図り、その能率を向上させることが、本会議の職務の一つとして定められている。そして、そのために必要な事項を調査、審議する目的で、180の研究連絡委員会（以下、「研連」という。）が設置されている。

去る4月の第100回総会では「日本学術会議の運営の細則に関する内規」（以下「内規」という。）が制定されたが、この中で研連については、とくに一章を設け総括的な規定をした。研連については、多くの学・協会の方々にとって関心が深いと考えられるので、上述の規定を中心に関連する規定の大略を以下で紹介する。

1. 研連の職務など

日本学術会議法第15条により、「……科学に関する『研究の領域』及び『重要な課題』ごとに……」研連を設置することが規定されているため、今回の内規においては、研連を「領域別研連」と「課題別研連」の2つに分類し、それぞれの職務を区分している。

(1) 「領域別研連」の職務は、次のとおりである。

関係する学術研究領域についての、①学術の現状及び長期的動向の把握 ②将来計画の立案及び研究条件の整備の検討 ③国内における研究機関又は学術研究団体（学・協会）との連絡調整 ④国際学術団体の国内委員会又はこれに準ずるものとしての職務 ⑤その他

(2) 「課題別研連」の職務は、次のとおりである。

①重要課題についての将来計画の立案及び研究条件の整備の検討 ②複合又は学際分野の研究の促進のための研究の連絡の調整 ③国際的協力事業等に関する国内委員会又はこれに準ずるものとしての業務 ④その他

2. 研連の構成と研連委員の任期

今回の内規では、研連は、関係する日本学術会議会員（以下「会員」という。）のほか、原則としてその研連と関係ある学・協会（正しくは、登録学術研究団体）や他の研連等の推薦により委嘱された者によって構成されることとしている。ちなみに、現在の委員定員総数は2,370人である。

また、研連委員の任期については、日本学術会議法により3年の定めがあるが、任期の通算制限については会員と異なり、法には規定がない。そこで今回の内規では、研連の活性化をはかるという観点から会員と同様の運用を行うことになり、「通算3任期まで」という規定をしている。ただし、会員在任期間や国際学術団体の役員等特別な事由がある場合の期間は除かれ、第12期以前の在任期間は算入しないこととしている。

3. 研連の審議成果の発表

研連での審議の結果、得られた成果については、委員会報告書としてとりまとめられて配布されたり、また、研連主催（関係学・協会との共催が多い）のシンポジウム・講演会等で報告されたりするが、それらの中で重要な事項については、春秋2回の総会の決定を経て、勧告、要望あるいは声明等として、日本学術会議名で外部へ出されることもある。

さらに、今回の内規により、前ページの物理学、結晶学両研連の「意見」のように、緊急を要する時には、おおよそ毎月開催されている運営審議会の承認を経て、研連名で外部へ発表することができるようになった。

なお、今回の内規では、会員の推薦には直接に関係のない研連本来の職務や構成等について定めたものである。第14期の会員の推薦に関係するいわゆる「関連研連」については、見直しを行って、来る10月の総会で必要な措置をとることとしている。

☆日本学術会議主催公開講演会—「21世紀の学術」—の開催のお知らせ☆

本会議は、このたび学術の成果を国民に還元するという日本学術会議法の趣旨に沿うための活動の一環として、本会議主催の公開講演会を開催することにした。

今回の公開講演会は、本会議の第13期活動計画の中でたてられている3つの重点課題に沿いつつ、21世紀を目指した学術の今後の展望を考えるという構想に基づき、次のように企画されている。

多数の方々の御来場をお願いしたい。

日 時：昭和61年9月27日（土）

13時30分～17時

会 場：日本学術会議講堂

（東京都港区六本木7-22-34）

（地下鉄千代田線、乃木坂駅下車1分）

演題と講演者

1. これからの科学の望ましい在り方

近藤 次郎（日本学術会議会長）

講演要旨：20世紀の科学の発展を回顧し、この趨勢で、これからの科学・技術がどのようになるかを予測する。1984年のオウエンスのようなSFを描く。そして人間の幸福とは何かをもう一度考え、環境・資源などから見た科学・技術の在り方を考える。

2. 創造的人間とその条件

本明 寛（日本学術会議会員・早稲田大学教授）

講演要旨：学術会議は、「創造的な基礎的研究の推進」に積極的に取り組むことを宣言している。そのため

には個々の人間の創造活動を重視し、創造性の発揮のための条件を明確にする必要がある。そこで人間的立場からこの課題にアプローチしたい。

3. 学術研究における国際性

西川 哲治（日本学術会議会員・高エネルギー物理学研究所長）

講演要旨：加速器などにおける国際協力に関して講演者自身の体験に基づき、その在り方、問題点、今後の展望などについて考える。

◆申込方法：往復はがき（住所、氏名、郵便番号を明記）

◆定 員：300人（先着順）

◆申込締切日：昭和61年9月20日（土）

◆申 込 先：〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議事務局庶務課講演会係

多数の学協会の御協力により、「日本学術会議だより」を掲載していただくことができ、ありがとうございます。なお、御意見・お問い合わせ等がありましたら下記までお寄せください。

〒106 港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会

（日本学術会議事務局庶務課）

電話 03(403)6291

会 員 異 動

(昭和59年8月) 入 会

浅野 武彦 茂彦 久一 公泰 上田 岸木
足永 明彦 彦三 年洋 田村 木草
牛野 義久 弘博 哲和 池野 小椎
飯屋 園要 春樹 智一 芝島 末杉
北村 秀信 夫義 政孝 高滝 多田
北原 信信 力涉 英豊 田張 長野
楠佐々木 橋清 弘賢 正紀 正忠 兆文
佐藤 井本 浦宅 田崎 本
高中 林細 松箕 三門 山山

退 会
石黒 伸 二
桜井 弘

(昭和59年9月) 入 会

鮎川 勝 弘 勅 夫 行 浩 進 雄 年 生 順 司 博 利 人
家本 和 孝 正 寿 雅 道 雅 武 一
稻上 大 大 岡 岡 小 小 楓 柏 龜

久一 治三 弘博 樹男 雄繼 範志 睦茂 懷喜 利郎 紀守 司孝 久士
公泰 年洋 哲和 智一 政孝 英豊 丙正 勝耕 一仁 和能 康
上田 村地 池野 田次 崎井 本田 中尾 田本 井田 本輪 本
岸木 草小 椎芝 島末 杉高 滝多 田張 長野 秀福 藤古 松三 山

退 会
岩下 義 明 雄 実 夫 夫 勝 成 範 明 序 夫 一 利
大西 斐 田 城 池 木 橋 上 田 田 村 沢 辺
甲斐 金 小 鈴 高 樋 福 柳 山 横 渡

死亡退会
御冥福をお祈り申
上げます
金子 健 児

(昭和59年10月)

入 会
岩見 和 俊 博 博 雄 二 博 行 彦 裕 健 彦 人 之 夫 明 二
内野 堀 英 臭 光 敏 春 光 克 睦 雅 和 俊 啓
内堀 北 川 下 野 柳 中 中 藤 和 施 田 啓
北木 楠 楠 小 田 田 天 林 フェルナペーター
布 施 田 啓
吉 田 啓

退 会
谷川 幹 也 久 一
宮田 本 亮

(昭和59年11月)

入 会
池田 清 一 樹 雄 樹 司 財 夫 夫 範 郎 生 剛 一 人 三 実 淳 雄 孝 満
伊藤 美 秀 修 文 将 貞 良 重 祥 典 謙 安 召 義 安
内原 崎 藤 菅 坂 木 島 賀 島 堂 藤 井 本 釜 本
北許 黒 佐 三 白 鈴 高 多 津 藤 内 永 橋 伴 前 松

武 者 末 二
山 内 良 之
横 田 益 夫
芳 山 純 郎
和 田 喜 昭

退 会
尾 不 雄 夫 弘 章 忍 造 三 章 豊 男 裕 道 洋 治 雄 昭 雄 之 樹 伸 彦 郎 彦 淳 宏 市 郎 二 晋 弘 寛 治 則 明 明 岳 剛 透 享 進 夫 治
赤 尾 赤 石 石 石 市 井 今 上 植 魚 鷄 宇 梅 大 大 太 大 岡 岡 小 木 鹿 加 金 金 唐 川 川 河 城 木 楠 久 保 田 富 泉 本 賀 坂 島 林 松 松

小 山 一 裕
近 藤 義 晴
齐 藤 寿 一
佐 伯 直 文
榊 原 宏 一
嶋 康 孝
新 谷 木 藤 木 口 橋 橋 本 中 中 鍋 部 上 崎 光 島 村 矢 安 山 崎 中 呂 原 石 阪 田 田 木 施 内 田 本 本 宅 岡
鈴 清 高 高 高 高 高 竹 田 田 田 谷 田 陳 津 辻 戸 利 中 中 仲 中 西 野 野 萩 羽 塙 浜 浜 原 広 布 堀 増 松 松 南 三 森

昇 夫 章 満 雄 文 均 行
良 秀 博 正
下 井 沢 田 根 賀 富 辺
森 柳 柳 山 山 吉 吉 渡

死亡退会
御冥福をお祈り申
上げます
森脇 延 信 年 司
山 本

(昭和59年12月)

入 会
青 木 太 一 志 之 弘 一 博 房 孝 進 彦 次 明 夫 満 仁 也 次 夫 二 弘 晃 進 丸 司 樹 夫 策 一 浩 司 一 文
阿 達 部 牧 斎 齋 渡 藤 藤 田 上 江 尻 西 田 間 藤 藤 内 内 端 田 月 菅 田 藤 藤 藤 明 藤
安 荒 安 安 石 伊 伊 伊 稲 井 今 江 大 海 江 間 加 加 川 川 川 岸 金 小 薦 近 後 後 五 齐

一 豐助 實
慶 敬之
中 林 田
山 若 脇 和

退 會
石 川 原 井 尾 合 地 間 島 木 中 田 野 川 本 沼 中 木 田 川
石 岩 岩 落 海 風 京 佐 々 田 豐 中 西 西 橋 藤 松 松 森 吉

死亡退會
御冥福をお祈り申
し上げます
青 武 雄
足 立 次 郎
神 日 野 顯 清

(昭和60月6月)
入 會
天 方 健 二
伊 崎 輝 明 美
石 井 川 博 司 吉
石 井 関 物 下 西 野 川 義 和
井 鑄 岩 上 上 大 大 大 小 倉 貞

真二宏 雄行 郎 久 幸 実 郎 勉 忠 明 彦 樹 実 朗 志 正 一 行 樹 保 之 芳 也 忠 郎 之 樹 明 河 良 通 一 彦 夫 弥 典 一 史 夫 道 哉 雄 眞 章 雄 悟
信 育 規 義 哲 喜 直 和 賀 正 喜 光 洋 伸 直 公 勝 正 卓 謙 朋 一 秀 亮 保 隴 俊 克 和 康 一 博 直 訓 幸

山 川 垣 井 神 上 塚 庭 野 森 野 里 山 村 原 野 山 沢 島 松 野 藤 山 広 本 木 沢 内 鍋 村 野 川 珂 村 野 村 光 田 田 島 間 見 江 山 橋 田 口
井 石 稻 今 牛 大 大 大 大 大 大 岡 尾 小 野 片 上 河 管 栗 黒 小 小 今 佐 下 末 杉 鈴 滝 武 田 田 池 坪 出 那 中 西 西 花 浜 濱 福 福 伏 古 丸 三 村 山

廣一男 隆諭 夫 男 生 晴 哲 一 弘 隆 夫 直 威 敏 郎 久 三 和 信 道 一
一 利 治 昌 順 一 哲 敏 久 剛 正 茂 和 輝 健 二 研 利 豊 正 浩
川 本 山 部 名 浦 本 田 井 島 野 川 本 田 谷 生 寺 田 田 口 浦 田 村 林
西 西 西 服 春 日 平 広 福 福 星 堀 松 水 元 柳 葉 師 安 安 山 吉 吉 吉 若

退 會
伊 藤 垣 藤 川 石 峨 藤 良 木 山 西 野 邊
梅 遠 小 興 嵯 佐 瀬 高 高 中 日 渡

死亡退會
御冥福をお祈り申
し上げます
藤 木 紘 一 保
保 本

(昭和60月5月)
入 會
赤 間

雄 洋 次 治 郎 朝 次 郎
正 康 磊 俊 伸 朝 次 郎
脇 本 島 本 木 山
達 增 宮 安 万 横

(昭和60月4月)
入 會
相 秋 秋 秋 浅 阿 安 天 有 安 石 磯 稻 魚 浮 内 及 大 岡 冲 奥 加 川 菊 菊 北 姜 久 保 栗 今 嶋 杉 高 瀧 滝 竹 武 出 中 新

司 典 漢 也 司 洋 均 裕 仁 勤 夫 康 仁 夫 尚 義 三 次 隆 治 司 志 雄 尚 明 美 之 寔 豊 滋 孝 一 夫 敏 勇 郎 潔 夫 也 夫 朗 浩
健 安 教 雅 武 伸 久 和 庸 基 忠 義 信 和 天 孝 征 高 紀 茂 佳 憲 昌 正 敏 太 正 哲 崇 哲
川 戸 本 則 川 田 井 本 本 藤 住 田 崎 水 丸 戸 橋 辺 本 田 井 村 本 田 田 野 内 田 元 山 上 沢 川 牧 田 川 屋 本 野 田
北 城 金 木 国 黒 黒 酒 坂 崎 佐 々 佐 塩 柴 嶋 清 治 郎 瀨 高 田 谷 寺 永 西 延 原 福 星 堀 前 松 丸 三 水 皆 三 牟 村 守 山 横 吉
退 會
阿 波 加 野 林 村
川 小 杉 角

史 正 爾 康 彦 進 明 雄 瞳 稔 夫 広 吾 保 一 人 吉 弘
研 和 捷 東 明 俊 文 正 和 賢 希 理 隆 和
井 藤 藤 山 元 田 村 木 橋 橋 岡 野 畠 村 村 山 辺
石 伊 遠 北 坂 沢 榛 高 高 高 竹 田 中 中 西 藤 横 渡

死亡退會
御冥福をお祈り申
し上げます
手 島 勝 太 郎 男
松 本 俊 男

(昭和60月3月)
入 會
浅 野 和 夫
浅 野 一 哉
飯 田 永 久 博
伊 石 賀 倉 田 俊 真 道 幸 尚 夫 智 史 稔 洋 司 彦 彦 介 清 弘 博 一 人
井 一 瀬 崎 田 田 吉 見 浜 堀 栗 崎 口 野 田 島
岩 内 江 枝 江 大 大 岡 小 尾 川 川 河 岸 木

豐博誠一一一克之明省明齊城一夫哲次雄昭二久豐弘彦德浩樹晶彦郎猷康男道信泉豐
 雅淳昌誠正宏裕勝千淳庸政祐幸政貞高臭一正直國綾嘉裕幹直正三英耕
 野道森田本井塚内田辻村矢美崎本貝比瀨田瀨田沼田田宗尾尾代本谷井中奈田川
 高田子塚塚津久堤堤手登中中能野橋初東日平平広藤藤前前正松松松三南宮村門山米渡
 死亡退会
 御冥福をお祈り申
 し上げます
 浅江野
 輪上野
 三英耕
 郎一二

則馨夫志 司春之郎左郎成三保史治馬夫進司浩剛憲一志彦平雄二光一平孝哲彦明建信二雄久南郎末禎治夫誠
 勝之高 會 健一博三 三一栄 仁俊数春 洋 康淳達照良康健正貞和純 俊秀巧正浩久直 一国 英和
 林辺部知 退 柳山野沢井川井藤田田田谷田田辺沢野枝分林藤 井田本本井藤藤保木添藤慶川木木木谷梨野
 若渡渡和 青青浅鮎幾石板伊上太岡岡紙亀川川川北北国国小近堺酒阪坂坂桜佐佐佐佐椎嶋進常助鈴鈴鈴住高高

二功司二二督一実一朗夫治行徹成之昭夫男夫典裕一巳人弘明一隆宏衛之匡弘嗣彦太男均春雄伸之三裕志英寿治
 真 博祐俊啓啓 順卓邦岳真 一朝弘静和敏武 伸克真和東啓公 達恭 武昌忠 菊 富美智 光裕省悦清雅昌省
 澤地本本木田橋中辺渕井村谷流納川里沢村村山田沼崎村村山石 沢田川谷野下田田浦崎下木田野原瀬中 田田
 白水杉杉高高高田田田田部坪水德中中中中成新西野野畑羽林福福古古星堀前前松松松三右水三村村森山吉

(昭和60月7月) 史臣哉生吾裕進雄生哉望就実哉一典樹賢之晃行康二男昌和培也夫弘司一人一治郎範夫繁豊臣徳史司彦和亮
 入 會 崇和英泰圭 繁幸正 吉臭俊裕靖秀 和嘉俊 啓友 良光達正隆誠榮澄純伸慎秀俊 重勝明博昭敏
 朝東安五池石泉磯伊岩岩瓜大大大尾小織各加加龜鴨志川河金木木櫛國久保山島川村藤堂本木々藤藤藤竹崎田

尚幸之明明史一成郎晃文峻二一男男明稔鈞彦 男武夫司夫勝房勲臣元 寬政雄義康明一郎彰
 宏洋健昭哲幸伸喜八郎 憲東賢幸拓克英 鴻正 光尚昌正富 美 一一 M. 光達正裕俊慎泰
 場澤松渡井曳橋原木山原 井口口崎村本 溝 退 野沼原瀬野良路尾田村 田山山谷田口内萩辺
 馬平平樋藤藤船正松丸丸宮関森山山山山山楊横 宇老榎加河相正関富中 原聖平前矢矢矢渡
 死亡退会
 御冥福をお祈り申
 し上げます
 池ノ上 村木
 川 鈴 信 正 義

生一博肇弘一行一男治夫純夫人哉治武裕和成治徹子之治鑄南元嗣志誠学幸雄郎弘修則進央崇城男裕二浩一平V
 文恭光 真隕耕幹昭規正幹靖秀昌 信一勇 美緒弘弘峯炳 保賢 和幸純辰 和 隆 秀利 兼一亮哲
 窪山上田川村村下山村内池野木藤藤 石木橋橋内田畑村 野本田塚田田澤務野野野野村村塚繩田原山草
 上龜川神北北北木桐杳源小河佐佐芝白鈴高高高竹竹谷田崔張鄭塚塚寺戸富富中中中中中中中中中中長長鍋西西野
 ハブリチック

(昭和60月8月)

入 會
 新井義雄
 歌橋千之
 榎嘉男
 戎遠藤邦
 尾北谷司義
 郡司直樹
 近藤司男
 迫田藤丈
 佐藤廣吉
 重紀義昭
 洲俊進
 関根井一
 田宮信
 高永澤士
 西濱田由
 濱林宏爾
 檜古垣孝
 堀田善治
 三水浦勇
 安井原美
 陽田川正
 吉川雅也
 廉

退 會
 伊藤千敦
 太田俊里
 兜森樹
 佐木貢
 椎野博
 田上秋
 田口彦
 中西禮
 丹羽春
 福田千
 山崎俊

死亡退会

御冥福をお祈り申
 し上げます
 井上博之
 白井俊雄

(昭和60月9月)

入 會
 生地賢典
 池田山力
 諫山川明
 石原島一
 井市田清
 伊井藤上
 江口英
 大大岡俊
 岡橋清
 森本秀
 藤原興
 本藤比
 合山義
 塚原正
 野菊史
 林藤辰
 田水本隆
 相倉伸
 高橋和
 高橋克
 高橋国
 高橋一
 高橋本
 高橋水
 高橋中
 高橋田
 高橋谷

退 會
 張本丙
 中本哲

死亡退会

御冥福をお祈り申
 し上げます
 今井光雄
 植田嗣治
 谷口光平

(昭和60年10月)

入 會
 池田一雄
 牛尾誠夫
 大岡武
 小岡潔
 小口醇
 梶井貞夫
 加藤浩志
 川姜地一
 北貴澤宏
 久野高
 酒嶋省
 杉田中康

谷中 西野橋原堀松松三皆宮宮村山吉
 村本野田呂目田江岡本浦川崎原上田屋橋
 宏和博 治敏新徹修俊展昌孝一彰史 慎
 治也美守人行一男一郎義紀雄哉彦朗光二
 退 會
 張本丙 懷男

退 會
 張本丙 懷男

死亡退会

御冥福をお祈り申
 し上げます
 今井光雄
 植田嗣治
 谷口光平

(昭和60年10月)

入 會
 池田一雄
 牛尾誠夫
 大岡武
 小岡潔
 小口醇
 梶井貞夫
 加藤浩志
 川姜地一
 北貴澤宏
 久野高
 酒嶋省
 杉田中康

谷口 井田健
 辻新原日藤牧水持山吉
 勲嗣樹郎則則貢夫勲二文
 健正健一則則貢夫勲二文
 久輝英 啓博

退 會
 加納司郎
 四戸敬昭

(昭和60年11月)

入 會
 阿部義男
 石崎哲行
 牛込浩進
 太田隆二
 加川上平次郎
 川崎出田 勉博修一夫朗一幸浩也一也郎男雄明美光夫二彦宏郎
 小酒佐菅 崎木中 藤川島上村中田岡越宮川本江永本永
 須鈴田田中布野畑福藤堀本宮宮安安山吉
 須鈴田田中布野畑福藤堀本宮宮安安山吉

退 會
 赤時 康彦
 赤路 康彦
 赤芦東油有井家上川村原藤上村田本咲内崎島田西方内藤子敷野島谷村橋島内林 藤村田 得木訪口本崎橋橋
 康武和敬 好福 和隆 則義久 忠秀博達康 裕茂 俊昭敏賢幹雅正充好 德俊憲和 静
 惠彦夫彦志孝洋藏義清努義司陽巨正昭司章完利二之雄弘弘豐寬泰之武也治郎治雄之吉藏範求郎雄義郎誠男進

雄則文司雄人隆明郎和雄士幸翼保一郎吾哲敬一史夫要淑弘久治児光夫弘雄臣満晃義之郎嗣正之樹
 守政洋正哲清 政拓精則雅和秀 真平愁 洋博洋 正宗康賢祥 英利茂政 定正宏惇恭裕善秀
 橋下富中 川延田田川沢代野原井川原山田宮村谷 嘉田田田山上宮 井尾本本鍋谷 屋本本鳥山
 高竹武竹谷谷種津飛中中中長西西西仁二ノ丹長原比福福藤藤淵本町松松松真水蓑守山山柚横
 ラマンJ. Y.

死亡退会
 御冥福をお祈り申
 し上げます
 大塚雅彦

死亡退会
御冥福をお祈り申
し上げます
谷 昌 博

(昭和 61 月 6 月)
入 会

石原裕二 柳隆佳 勝正俊重 尾島金川 宮 郷農 藤海倉 柴平高竹立 繪田張坪鍋成野羽林原平藤星細水宮
一稲岩植薄占岡金川金釘 グリーンデビッド 農藤海倉 田 橋山島花山中 將文力憲 誠正敦信敏尚文和東浩葆敏
之 雅裕 二資樹 司 勇 勇 志 宏 哲 元 平 偉 治 淳 司 尚 嗣 義 弘 明 樹 孝 司 二 禄 夫

之男幸之憲朗人つ 晃昇之己修達澍充一 彦幸稔彦之郎學明雄廣幸雄男 壽輝昭量忠幹裕
雅節敏匡昭耕秀文ひ 雅克 顯成 弘祥秋辰 康正耕良芳哲唯伸芳幸 万輝昭量忠幹裕
口良藤野原田 田橋村川利 原田村井田原 田川間野本田 船川中田田村
坂相佐三篠柴進徐砂高竹谷玉陳陳堤寺德中永西萩林東東広二本楨松溝湊三安山吉吉吉
退 会 登一郎 務夫三弘一喜
川村沼橋浦原木辺 相岩小高三八渡渡

爾 正美夫章二 郎二憲彰望也 栄子勝滋民一
智幹 良豊綱泰 直徳多美和勇
田 部川山田部本坂中治田内橋川村永野
退 会 阿石石岩高瀧田田丹繩浜丸ノ三皆三安吉

死亡退会
御冥福をお祈り申
し上げます
荒木逸夫 進

(昭和 61 月 5 月)
入 会 新生石井犬井今今上梅大大岡岡沖貝加龜坂
井田井出飼上井西野津迫田中田村田原地井井
一和 裕篤正宏祐隆 直道隆寛延孝

(昭和 61 月 4 月)
入 会 赤荒池石伊今大大小笠棍棍金子沢田室藤藤 川藤 下植 尾屋路井山田部村部城池所田崎田野原 杉
根木田原藤井坪宮沢岡本山子子沢田室藤藤 川藤 下植 尾屋路井山田部村部城池所田崎田野原 杉
雄彦彦郎尚正雄信一樹実孝彦雄成一登寿徳道一美平三二男久嗣一郎己勝太郎綴司一正博毅司樹史行人次和吉隆
晴利雅利 俊良英玄 佳武真能宏 千代光正博雅海勅信正武裕順直 習太 臭慎 一 隆秀博孝静佳相正

男雄一博潤行則紀雄昭巳一弘二喜始衛彦 潤人志磨男 二之二雄明信夫一
東康洋保 敏重宏幸為雅順充清久哲一成 昌広 治 栄信省英 智敏陽
本田木谷辺植築村田村田尾田山田田村田 井田本間 浦村 井浦田辺 沢口林澤木木井部本村辺
坂鳴鈴曾田柘都富豊中中永西西西沼野袴 ヒーグルロバート マラマアルバー 三三森 八百山吉渡渡 相湖小洲鈴鈴樽南札吉渡

典宏三泰久隆 一郎一徹之磯一誠城宣男秀浩要
義 泰通平 文芳 栄 純 秀正益光
藤野田田瀬出 本藤田石谷島村田浪田辺
伊上奥梶川小境坂佐篠白杉築中中春藤吉渡
死亡退会
御冥福をお祈り申
し上げます
松 林 敏 夫
(昭和 61 月 3 月)
入 会 阿五十石石市伊太太大大荻奥折加北木日小兒小今坂
嘉嵐黒田原藤田田間谷莊井野藤島村下泉嶋松野口
博和志一孝裕秀光之浩夫之法治伍志也宏尊雄弥男
靖毅洋清 正好英美鼓健道雅伸豪卓明 英和治

一司 警 喜 左 一 喜 男
 英省 浩 兵 修 己
 嶋永 田本 澤山 辺
 矢安 山山 吉若 渡

退 会
 之正 一美 彦馬 煥進 治三 明一 哉吉 一夫 茂德 昭次 之仁 孝二
 義愈 伸琢 勝臭 昌 增桂 裕健 秀城 幸輝 知利 俊健 弘博 勇
 立庄 塚野 沢郡 木場 沢藤 藤藤 藤田 藤橋 良田 森 田崎
 足今 大大 兼上 金清 木熊 後後 佐佐 篠嶋 菅首 高比 高德 永平 廣 蓑

行 潔
 直 本
 内 山

死亡退会
 御冥福をお祈り申
 し上げます
 佐藤 倉 伸 有 雄
 高

(昭和61月7月)
 入 会
 宏夫 朗司 大聡 介章 明宏 至潔 雄好 茂男 二和 治明 明豊
 泰敏 利収 浩道 慶貴 孝 義正 通潤 正卓 真邦
 緋足 綾飯 池池 石石 磯伊 稻今 白海 大大 岡岡 岡長 小

次雄 年一 弘也 寛広 男勝 次宏 生浩 三彦 寛一 弘平 弘行 文成 久穰 一仁 晋厚 二就 潔
 幸伸 昭隆 義隆 在幸 喜 幸 泰幹 晋和 与 耕一 玉秀 和義 俊誠 俊一
 藤子 野地 掛田 原野 玉鉄 村藤 藤水 崎橋 本内 内 中岡 村田 沢村 村田 岡
 算算 加金 茅菊 金鞍 菜桑 河小小 斎佐 清杉 高高 竹竹 橘田 田谷 田津 中中 中成 西

二明 彦也 至久 博幸 之一 貴孝 通作 昭貴 清実 明弘 司彦 郎央 一隆 司俊 夫
 浩雅 伸和 臭信 国金 裕淳 清 宏彦 寛裕 智 克一 一晃 俊英 洋英 富
 本田 口井 野井 岡川 沢 田郷 永 浦木 松吉 下屋 木江 浦崎 下本 山松
 橋八 柵樋 平平 福福 藤藤 堀堀 堀本 松 マブデルバタハギ 三三 村本 森森 守八 谷内 山山 山山 湯若
 退 会
 池 上 一 成

寬幸 右二 夫道 治治 德操 行薰 秀荣 德弘 男夫 敦昭 已治 彦人 理V 義高 三一 哉平 博
 昭恒 博浩 恒正 年康 信 正重 昌信 徳 宗克 健洋 久博 久秀 修亮 秀源 崇
 里手 崎島 瀬藤 村本 田入 松原 木田 野田 築山 島河 崎田 崎原 川
 伊井 大大 加加 木楠 笹沢 重篠 鈴高 高多 都徳 永並 西西 野萩 長谷 川ハブリチク 松 永元 野治 本
 濱林 福福 牧矢 山

雄 昭
 良 文
 田 本
 吉 吉
 (昭和61月8月)
 入 会
 晶文 道久 人夫 之司 信忠 幸介 吉
 元素 俊直 義安 裕雄 秀俊 敏敬 障
 谷村 森田 合田 生中 浜雲 部崎 井
 板今 大岡 河澤 城竹 長名 服藤 松

退 会
 雄 次 浩
 繁 要
 田 木 田
 磯 大 吉
 死亡退会
 御冥福をお祈り申
 し上げます
 鎌倉 田 正 一 夫

外国會員

(昭和59年9月
~昭和61年6月)

入會

- Abdol K. Danaie
- Abdullah A. Alabbadi
- Adolphus Ehiabhi Ojobo
- Adrian Sanchez Contreras
- AGRUPACION I + D ACEROS ESPECIALES
- Ali Reza Ghasemi
- Altos Hornos de Vizcaya, S.A.
- Anibal Gomez
- Anthony G. Alleyn
- Anthony Wilson
- Antolin Rodriguez S. Jefe de Laminacion, Aviles
- Babatunoe Bejide
- Barry Solly
- Bernard Dupuis
- Bertil C. Lundin
- Bharat Heavy Elec. Ltd.
- Bipina Bihari Patnaik
- Brad Bowman
- C.E. AGUIRRE
- C.N. Harman
- Chun-Kan Hou
- Claes Tornberg
- Clement Rome
- CSIRO (Div. of Mineral Eng.)
- CSIRO (Inst. of Ener. and Earth Resources)
- Curt J. Christensen
- Cyril Kaonyeuloaso Iwujii
- Dansk Industri Syndikat A/S
- David. G.C. Robertson
- Davy McKee (Sheffield) Ltd.
- Douglas J. White

- Edmond Vachiere
- Edward Pong
- Emil G. Signes
- Elliott A. Minoff
- F. Weinberg
- Fernando Abece
- Franck Bernard Villette
- Francois Pesche
- Friedhelm Karl Neumann
- Gabriel Oladipo Egundebi
- Garry Leadbeater
- Guest Keen Williams Ltd.
- Hatch Associates Ltd.
- Hamid Jami
- Hans Beer
- Herbert Bumberger
- Hossein Zamani
- Huibert-Willem den Hartog
- Huffaz Seamless Pipe Ind. Ltd.
- Huseyin Kegeci
- Inland Steel Corp., Operating Technology Dept.
- Itaru Jimbo
- J.F. Beisler
- James N. Howell
- Jean-Jacques Gautier
- Jean-Louis Muller
- Jean-Luc Jacquot
- Jean-Marie Henry
- Jean-Marie M. Larrecq
- Jean-Yves Lamant
- Joaquin Bas
- John Gordon Mathieson
- Jong Jin Pak
- Jozef Alfons Dilewijns
- Keech Castings Group Pty. Ltd.
- Keiji Ohno
- Kenneth Edward Blazek

- Keshav Bahirav Kale
- Kevin Antony Rooney
- Kim L. Hockings
- Larry Hicks
- Lars-Ingvar Staffansson
- Lawrence W. Hicks
- Lennart Berygvist
- Leo Pentti Karjalainen
- Madhukar G. Ranade
- Mahindra Ugine Steel Co., Ltd.
- Malcolm John McCarthy
- Materials Res. Lab., ITRI
- Michael Pretor
- Mohamed B. Aboukhesem
- Mohammad Omar Yazdani
- Mustafa Hortum
- National Steel Crop.
- Nevzat Oral
- Norsk Jernverk
- Othon Rego Monteiro
- P. N. Richards
- Partap Steel Rolling Mills, Ltd.
- Patric W. Mackay
- Paul Omgibunam Okonji
- Philippine Sinter Corp.
- Pierre Pedarre
- Pietro Brozzo
- R. Littlewood
- Ram S. Patil
- Rasool Solaymanpour
- Raymond J. Glatthorn
- Ricardo de Abreu Anawate
- Richard J. Choulet.
- Robert O. Carson
- Ronald L. W. Holmes

- Rough Steel Co.
- Salem Steel Plant, SAIL
- Seoung Won
- Seung-Hee Lee
- SIDMAR N.V.
- Siraj Baig Ghazi
- Skagit Manufacturing Co.
- Stephen Waslo
- Suarez Antolin Rodoriguez
- Suherdi S. Tanubrata
- The Broken Hill Pty. Co. Ltd.
- The Hinckley Group
- The Siam Iron & Steel Co., Ltd.
- Univ. of British Columbia, (Dept. Met. Eng.)
- W. Singer
- William Michael Bond
- Woo-Joong Kim
- Yinzhi Cao
- Yousaf Jamal Salim
- Yu-qui Lu
- Zhong Li
- 韓国機械工業振興会
- 金鎮逸
- 金京辰
- 金東洙
- 金榮吉
- 金英培
- 金俊植
- 金台東
- 金兌燁
- 金正混
- 金善愿
- 金英模
- 金台鉉
- 金松菊
- 吳亨錫
- 吳世翊
- 權敬植
- 權億根
- 嚴正鉉

- 崔徐朱周曹曹曹辛趙趙申孫板朴朴朴朴白宋襄劉安張張柳姜俞南房梁盧李李李李李李李李李李李李李李李李
- 政鎮昌裕東容藟亨祥憇相晋寧世璋在正鍾基孝大元秉鎮錫文圭光
- 極性熙于仁元泰一基
- 東允南碩根桂彰
- 必庸

- 詰国均相鉉九之基鎬衡敦君憲憲欽均道珉男錫詰鐘樑用德鉉鉉在混文基春迷宰鎬周宰浩潤振燮康根洙榮煥重賢得
- 李德洛
- 李春鎬
- 李鎮浩
- 趙炳甲
- 朴龍鎮
- 陳子明
- 仁川製鐵(株)
- 退會
- Aitor Galdos
- Alan Ross McKague
- Altas Steels
- Arnfinn Ve
- Bertil C. Lundin
- Bokaro Steel Plant, SAIL
- Bozel Electrometallurgie
- Centro de Investigaciones Carboniferas Y Siderurgicas
- Gen. de Studio per la Termodinam. Chimica alle Alte Temp.
- Chol Kyl Syn
- Christopher C. Chukwurah
- Creusot Loire
- Edwin Rober Phillips
- Eiji Kobayashi
- Eiji Umene
- Eizo Yasui
- Enrique Iainez
- Eslamic Applied Res. Cen Of Iran
- Flipe P. Calderon
- George Idamarhare
- Giovanni Odone
- H. G. North
- Hajimu Shibutani
- Henri Grober
- Hideki Nakano
- Hoogovens Grope B. V.
- Horace N. Lander
- Hosdurga Copala Krishna
- Houldsworth Sch. of Appl. Sci.

Hung Yu HYLSA, S.A. ILAFA Industrial and Structurals Private, Ltd. -Ing. Rolf-Dieter Baare IPSCO INC. J. W. Grindrod James H. Waxeiler Jean-Jacques Van Neste Jean Rene Pelletier John E. Werner	John Ltd., R & D Cen. Lysaght (Australia) Jun Eui Jin JUNE YOUNG CHANG Karl Heinz Schmitz Keith K. Kappmeyer Kiyoshi Ikeda Koji Oki Koppers Company, Inc. L. Azocar Lawrence Heaslip Lennart Bergqvist	Leonard E. Malin M. Bahaa Zaghloul Maharashtra Elektrosmet Ltd. Mahindra Ugine Steel Co., Ltd. Masakatsu Ueno Michael R. Notis Miguel Osorno- Torres Momosan Barry Iwuede Osamu Dairiki P. V. Murty	Peter Karl Rademacher Philippe Maitrepierre R.H.G. Rau R.M. Wilthew Richard C. Scim Rodolfo Ayala Chavez Shiu Wing Steel Ltd. Shogo Fukui Staffan Ekelund Tetsunori Kajita Univ. of British Columbia Dept. Met. Eng.	Univ. of Oklahoma Library William E. Dennis Ye Yuzhong 黄 熙 暎 高 振 隆 高 錫 水 金 雄 來 金 基 敦 許 完 旭 許 南 釋 趙 愨 衡 陳 擇 灯 襄 大 喆	愈 光 在 朴 賢 緒 朴 世 憲 朴 鍾 珉 李 鍾 鳳 李 忠 馥 南 湜 滉 申 相 敦 死亡退会 御冥福をお祈り申 上げます (名誉会員) John A. Fellows
--	--	--	--	--	--

書 評

材料テクノロジー第 13 巻

「セラミック材料」

堂山昌男・山本良一編
水田進・河本邦仁共著

本書は材料テクノロジーシリーズ全 25 巻のうちの 1 巻をなすものである。

従来の材料科学に関する講座本は物性論的観点から取り扱ったものが多いが、本書は材料と材料システムの開発に重点がおかれ、入門書と専門書との間を埋めることを一つの目的として、次の 4 章から構成されている。

第 1 章は「セラミックス序論」と題し、入門者のために種々のセラミックスの基礎物性や用途を紹介している。第 2 章は「材料物性とセラミックス」と題し、材料物性の基本、すなわち、材料一般の熱的物性、機械的物

性、電気的物性、磁氣的物性、光学的物性、化学的物性、を解説しながらセラミックスの特徴を紹介している。この章に本書の半分以上が費されている。第 3 章は「セラミックスの製造」と題し、均一反応、不均一反応、重合反応、成形技術などを論じている。第 4 章は「先端技術におけるセラミックス」と題し、システムと材料の関係を論じている。

本書を理解するには、物理学および化学の十分な基礎知識が必要であり、通読する本ではない。これは、現在問題点を有している人がそれを解決する方向を見出すための鳥瞰図を意図して書いた、という著者らの観点からすれば当然であろう。

何か問題点が出たとき、まずこの本から解決のためのヒントを得て、さらに詳細な専門書に移る、という使い方をすると便利な本となる。

(雀部 実)

A 5 版 268 ページ 定価 2800 円

1986 年 4 月 東京大学出版会発行

原稿用紙、合本ファイル有償頒布について

1. 原稿用紙 (鉄と鋼用本文用紙 50 枚・図面用紙 8 枚綴) 1 冊 500 円 (〒 350 円), 2, 3 冊 (〒 700 円)
2. 図面用紙 (鉄と鋼用 50 枚綴) 1 冊 500 円 (〒 350 円), 2, 3 冊 (〒 700 円)
3. 講演前刷用原稿用紙 鉄と鋼用 (1 枚 30 円), Transactions ISIJ 用 (1 枚 30 円)

郵送頒布の場合は下記のとおり枚数を限定させていただきます。なお 50 枚以上の場合は係までお問合せ下さい。

	10 枚	20 枚	30 枚	40 枚	50 枚	備 考
鉄 と 鋼 用	540 円	950 円	1250 円	1550 円	2200 円	} 料金は送料込み
Transactions 用	540 円	840 円	1250 円	1550 円	1850 円	

4. 「鉄と鋼」用合本ファイル 1 冊 会員 330 円 非会員 360 円 (送料別)
5. 申込方法 ①原稿用紙の種類, ②枚数, ③送付先明記のうえ, ④料金 (1000 円以内は切手でも可) を添えお申し込み下さい。
6. 申込先 100 東京都千代田区大手町 1-9-4 経団連会館 3 階 日本鉄鋼協会庶務課